



TITLE:

巨大陰嚢内脂肪腫の1例

AUTHOR(S):

吉田, 裕之; 安元, 章浩; 神野, 浩彰; 竹中, 生昌

CITATION:

吉田, 裕之 ...[et al]. 巨大陰嚢内脂肪腫の1例. 泌尿器科紀要 1994, 40(3): 269-271

ISSUE DATE:

1994-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115215>

RIGHT:

巨大陰嚢内脂肪腫の1例

香川医科大学泌尿器科学教室 (主任: 竹中生昌教授)

吉田 裕之, 安元 章浩, 神野 浩彰, 竹中 生昌

GIANT INTRASCROTAL LIPOMA: A CASE REPORT

Hiroyuki Yoshida, Akihiro Yasumoto, Hiroaki Jinno
and Ikumasa Takenaka

From the Department of Urology, Kagawa Medical School

A case of giant intrascrotal lipoma is presented. The patient was a 72-year-old man with the chief complaint of painless swelling in the scrotum which had been noticed about 10 years previously. In the right scrotum, an elastic soft mass with negative transillumination was palpated. Ultrasonography and X-ray film demonstrated that it was solid mass. Under the diagnosis of intrascrotal tumor, an operation was performed. As the testis, epididymis, and spermatic cord was intact, the tumor was removed. The pathological diagnosis of the tumor was a well-capsulated benign lipoma. Including the present case, 29 Japanese cases of intrascrotal lipoma are reviewed.

(Acta Urol. Jpn. 40: 269-271, 1994)

Key words: Lipoma, Intrascrotal tumor

緒 言

陰嚢内脂肪腫は比較的稀な疾患であり, 1912年小澤の報告¹⁾以来, われわれが調べたかぎりでは本邦で68例が報告されているにすぎない. なかでも500g以上の巨大脂肪腫は稀である. 今回われわれは重量980gの巨大陰嚢内脂肪腫の1例を経験したので報告する.

症 例

患者: 72歳, 男性

主訴: 右陰嚢内容の腫大

既往歴: 59歳時, 胃癌, 胆石, 右鼠径ヘルニアにて手術を受けている.

家族歴: 特記することはない.

現病歴: 昭和56年右陰嚢内の鶏卵大の腫瘤に気づいたが放置. 腫瘤が次第に増大し, 歩行に支障をきたすようになったため, 平成4年1月7日当科外来を受診した.

現症: 体格は中等度, 栄養状態は良好. 胸腹部には理学的に異常を認めない. 局所所見では右陰嚢内に精巣とは独立した新生児頭大の腫瘤を触知した. 腫瘤は表面が比較的平滑, 弾性軟であり, 波動, 透光性は認

めなかった.

検査所見: 末梢血液, 血液生化学, 尿検査においては特に異常は認められなかった.

X線学的検査では KUB, IVP とともに異常を認めなかった. 陰嚢軟部撮影では陰嚢内に充満した, 充実性腫瘍像が認められた. 腫瘍はX線透過性の亢進を示しているため, 腫瘍内の血管陰影が浮き上がっていた. 異常石灰化像は認められなかった (Fig. 1).

超音波学的検査: 陰嚢内に内部不均一な充実性高エコー像を認めた.

以上の所見より右陰嚢内腫瘍と診断し, 平成4年1月13日手術を施行した.

手術所見: 腰椎麻酔下で右陰嚢上部より外鼠径輪に沿って切開を加えると, 精索, 精巣とは独立した黄色の腫瘍が認められた. 腫瘍は周囲組織とは容易に剝離可能であった. 術中迅速病理検査にて良性脂肪腫の診断をえたため, 腫瘍摘出のみにて手術を終了した.

摘出標本: 大きさ 10×15×7 cm, 重量 980 g. 淡黄色の断面を呈する充実性腫瘍であった.

病理組織所見: 大小不同を示すやや大型の脂肪細胞の分葉状の増殖がみられた. 被膜はよく保たれており脂肪芽細胞はまったく認められない良性脂肪腫の所見

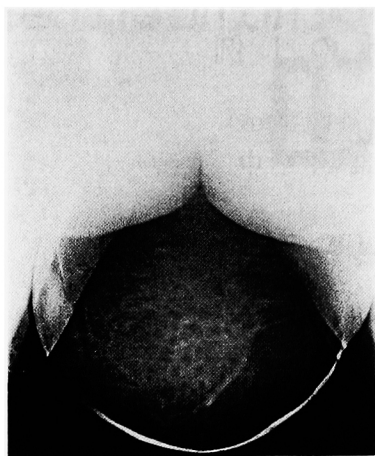


Fig. 1. Scrotal X-ray film demonstrates that the scrotal content is a solid mass. As the tumor is X-ray lucent, the vascular shadows of the tumor are clearly visible.

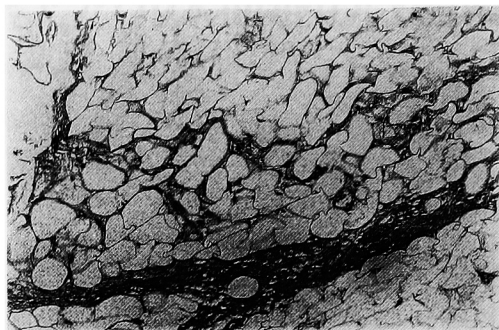


Fig. 2. Microscopic appearance of the resected tumor. The diagnosis is a well-capsulated benign lipoma.

であった (Fig. 2).

考 察

陰嚢内脂肪腫は陰嚢内に発生する良性腫瘍の中では最も高頻度にみられる疾患である。Leyson ら²⁾は発

Table 1. Japanese cases of intrascrotal lipoma (After Kamei's report)

報告者	年齢	患側	重量 (g)	報告年	備 考
41 酒本ら	10	右	不明	1983	日泌尿会誌 74: 891
42 後藤ら	63	左	9	1983	日泌尿会誌 74: 1073
43 島居ら	63	左	15	1983	泌尿紀要 30: 1615-1669
44 坂本ら	3	左	4.5	1983	泌尿紀要 32: 277-281
45 西 ら	62	右	140	1984	日泌尿会誌 75: 1490
46 和田ら	48	左	130	1985	臨泌 39: 879-881
47 原 ら	76	左	260	1985	日泌尿会誌 76: 291
48 山田ら	73	左	440	1985	日泌尿会誌 76: 928
49 竹村ら	22	右	200	1986	日泌尿会誌 77: 1065
50 河村ら	68	右	500	1986	八千代病紀 7: 37-39
51 鍋嶋ら	64	左	370	1986	西日泌尿 49: 639-641
52 川上ら	53	右	69	1986	臨泌 41: 348-349
53 小出ら	42	左	72	1986	泌尿紀要 33: 133-135
54 三浦ら	48	左	130	1986	日泌尿会誌 77: 368
55 高橋ら	4	右	9	1986	西日泌尿 48: 1472
56 宮崎ら	58	右	33.5	1986	西日泌尿 48: 609-611
57 政井ら	73	右	165	1987	日泌尿会誌 78: 1115
58 上田ら	52	左	370	1987	臨泌 41: 79-81
59 小野ら	58	右	100	1988	日泌尿会誌 79: 2078
60 蔵 ら	53	左	180	1988	泌尿紀要 35: 1629-1631
61 金子ら	50	右	15	1988	臨泌 45: 60-61
62 清水ら	77	右	100	1988	臨泌 42: 743-745
63 吉田ら	63	左	450	1988	日泌尿会誌 79: 1736
64 長野ら	54	両側	115	1989	日泌尿会誌 80: 1091
65 曲 ら	78	左	230	1989	日泌尿会誌 80: 479
66 清河ら	72	左	2500	1990	臨泌 44: 819-821
67 古賀ら	65	右	55	1990	日泌尿会誌 81: 341
68 田中ら	76	右	570	1991	日泌尿会誌 82: 842
69 自験例	72	右	980		

生部位によって Paratesticular, Extratesticular の2つに大別している。前者はほとんどの症例が精索由来であり精索脂肪腫として報告されている例が多い。後者はその発生部位を特定しえない例が多く、陰嚢内脂肪腫として報告されている。自験例では明らかに精索とは独立していたが、腫瘍が陰嚢内に充満しておりその発生部位については特定しえなかったため、陰嚢内脂肪腫と診断した。

本症の本邦報告例は1912年小澤の報告¹⁾以来、われわれが集計しえたかぎりでは、自験例を含めて69例が報告されている。今回われわれは亀井らの1983年までの報告²⁾以降の29例を集計した (Table 1)。

本症の年齢分布は3歳から78歳と幅広いが、特に50歳から70歳台に多くみられ40歳以上の症例が全体の約86%を占めていた。重量は4.5gから2500gに至るまで様々であったが、200g未満の比較的小さなものが多くみられた。自験例は980gで、今回の集計の中では2番目に大きなものであったが、これは陰嚢内腫瘍に気づいた患者が、自覚症状がみられないため10年間にわたって放置していたためであると思われる。

臨床症状としては無痛性陰嚢内腫瘍が最も多いが、過去の報告例の中には有痛性を示す例も稀にみられた。河村ら³⁾は腫瘍の牽引による痛みのため鼠径ヘルニアの嵌頓が疑われた精索脂肪腫の1例を報告している。また大きな腫瘍による歩行障害は自験例を含め2例であった。

本症例の診断にあたって触診、超音波検査に加え、陰嚢内容の性状を調べるため陰嚢軟部撮影に施行した。陰嚢軟部撮影にて陰嚢内血管が浮き上がって見えたことから陰嚢内容のX線透過性は水より高く、脂肪が推測された。本症例のように陰嚢の腫大が著しい場合、陰嚢軟部撮影の施行は容易であり、陰嚢内の石灰化の有無、X線透過性の程度などを知るために有用であると思われる。自験例では透光性はみられなかったが、本症の報告例中約半数は透光性を有するため試験穿刺を行った症例もみられた。しかし、本症の報告例の中には腫瘍の一部に異型を認めたという症例⁴⁾もある

こと、また生検以外の検査では脂肪肉腫との鑑別が困難であることより、本症に対して試験穿刺を行わない方がよいものと思われる。

治療法については、本症は良性疾患であり腫瘍のみの摘出にとどめるべきであるとされている。しかし、精索由来の症例では腫瘍と精管および精索血管系との剝離が困難である例が少なくないため、やむなく患側の陰嚢内容摘出術が行われることが多い。精索由来と診断された15例中8例が陰嚢内容摘除術を受けていたが、その治療法については今後検討を要するものと思われる。また、本症の報告の中には再発例^{6,7)}もあるため、術後の定期的な経過観察が必要であると思われる。

結 語

本邦69例目と思われる巨大陰嚢内脂肪腫の1例を報告し、若干の文献的考察を加えた。

本論文の要旨は第50回日本泌尿器科学会四国地方会において発表した。

文 献

- 1) 小澤慶三郎: 精系脂肪腫ノ示説. 日泌尿会誌 1: 36-43, 1912
- 2) Leyson JFJ, Doroshow LW and Robbins MA: Extratesticular lipoma report of 2 cases and a new classification. J Urol 116: 324-326, 1976
- 3) 亀井義広, 松本 茂, 大橋洋三, ほか: 陰嚢内脂肪腫の1例. 西日泌尿 45: 869-871, 1983
- 4) 河村健雄, 七野滋彦, 佐藤太郎, ほか: 巨大な精索脂肪腫の1例. 八千代病紀 7: 37-39, 1987
- 5) 榊鏡年清, 三橋慎一, 近藤 俊, ほか: 陰嚢内異型脂肪腫の1例. 日泌尿会誌 73: 1487-1488, 1982
- 6) 市川篤二, 高安久雄, 近藤 賢: 精索腫瘍再発例. 日泌尿会誌 48: 315, 1957
- 7) 平野哲夫, 石川登喜治, 高村孝夫: 再発性精索脂肪腫. 日泌尿会誌 64: 75, 1973

(Received on August 9, 1993)
(Accepted on October 21, 1993)